

市中感染症診療の考え方と進め方 IDATEN 感染症セミナー

IDATEN セミナーテキスト編集委員会 編

＜書評者＞ 山中克郎（藤田保健衛生大学准教授・内科学）

「いだてん」って、韋駄天（増長天八將軍の一神、小児の病魔を除く足の速い神）？ いやいや日本感染症教育研究会こそ「IDATEN」なのである。歴史は古くなんと…大野博司先生（洛和会音羽病院）がまだ研修医だった2002年に、麻生飯塚病院で始められた「病院内感染症勉強会」にさかのぼるという。現在は太田貴夫先生（静岡県立静岡がんセンター）が代表世話人を務められ、年に2回感染症セミナーが全国で開催される。私は2008年の夏に参加させていただいたが、市中感染症のreviewを豪華講師陣から聞くことができ、実に充実した感動の3日間だった。

「IDATEN セミナーの本が発売されるらしい」との噂を聞き、居ても立ってもいられず馴染みの本屋に注文した。「お～、これぞまさに IDATEN セミナーではないか！」

冒頭の「感染症診療の基本原則」では、青木 眞先生が「発熱＝感

染症の存在ではない」こと、「CRPや白血球数上昇の程度＝感染症の重症度ではない」ことを熱く語られる。

各論では IDATEN セミナーにも登場する著名講師陣から「肺炎」「髄膜炎」「急性腹症」など市中でよく遭遇する疾患14ケースについて、診断への具体的アプローチ、鑑別診断、治療がしなやかに語られる。どの項目も非常に具体的で日常診療の即戦力となる。さらに「グラム陽性球菌」「グラム陰性桿菌」「嫌気性菌」というカテゴリーからみた臨床で重要な微生物、「ペニシリン系」「セフェム系」「マクロライド系」「キノロン系」抗菌薬特性の解説が続く。

私は救急診療の場で研修医教育を行っている。感染症は進行が早く重症化しやすいので、極めて重要な分野であるが、系統立てて理論的に教えることはなかなか難しい。抗菌薬使用前の血液培養（2セット）、感染症が起きている臓器を特定し起炎菌を想定、迅速な

治療の開始、さらに広域から狭域抗菌薬への変更という「感染症のベーシックアプローチ」をこの本では学ぶことができる。

「間断(かんだん)の音なき空に星花火(ほしはなび)」

窓を閉ざしているため音のない花火…それが満点の星よりも美しく空に咲く。27歳の若さで白血病のため早世した女優、夏目雅子の絶句である。

セミナーで教育を受けた IDATEN 魂を持つ若者が全国で大輪の花を咲かせようとしている。この本は、これから感染症の勉強を始めたいと思っている医学生、感染症診断・治療の実践を学びたい研修医、どのように感染症を教えればよいか迷っている指導医にとって大変参考となる。豊穰の時を刻み続ける IDATEN、感染症教育の真髄に出会える、そんな魅力がこの本にはある。しんと静まり返った秋の夜長こそ、夏目雅子の句に想いを寄せながら、この良書をじっくりと楽しみたい。

●B5 頁216 2009年
定価3,675円
(本体3,500円＋税5%)
[ISBN978-4-260-00869-3]
医学書院刊